

淀川流域委ウォッチャーズ 7(060424 版) 「委員長、部会長投票は、新たな一歩」

久々の流域委員会の開催。1月、2月のドラマも記憶から遠のき始めている。1月の委員会では、流域委員会の委員長が参加委員全員の無記名投票によって決定した。さらに2月の委員会では、各地域別部会の部会長が部会構成委員の無記名投票によって決定した。実質的な議論が進んだわけではないが、流域委員会は大きな一歩を踏み出したのだ。

私は4年間の在任中、違和感のある場面に何度も遭遇した。部会長やワーキンググループのリーダーを決めるとき、委員長や他の運営委員の先生が、休憩時間の間に他の先生のところに来て「〇〇先生、お願いします」「わかりました」で、決まってしまう。「えー?!私だって一応メンバーなのに、何の発言権もないの?」と思った。そりゃあ学者の世界のことは何も知らないから、その先生がどんな研究成果があって、どれほど有名ななんてわからない。でも部会長やリーダーは、議論の進行役もこなさなければならぬ。話すのは苦手だったり、声がやたら眠気を誘う方もいる。何より、出席すること自体がままならない先生が運営されるのでは、議論が活発になるはずがない。そういう判断基準も含め、より活発に議論できる運営をしてくれるかどうかで考えるなら、ただの流域住民にだって委員の一人として自分の所属部会、WGの代表を選ぶ権利はあるんじゃないの?でも、いわゆる諮問委員会って、こんなもんなら

だろうと諦めるしかなかった。

河川管理者には、流域委員会の意見を尊重し、住民の意見を聞き、河川整備計画を策定してほしい。できる限り公開で議論を見守ってほしい。けれど流域委員会の運営が、住民感覚になじみやすいものであることも大切だと思う。普通の人は、クラス委員に始まって、自治体の長も議員もみんな投票で選ぶのだ。不透明な運営は、住民の不信を招く。今回の流域委員会の投票は、他の流域委員会もぜひ取り入れてほしい。

寺田前委員長は、正に「淀川モデル」を自ら実践されたのだ。貴重な一歩だったと思う。それにしても、委員が投票の方法を議論するのを、とても楽しそうに見守っておられたのが印象に残った。一年間見られなかった朗らかさだった。よほど、委員長の責任は厳しいものだったのだと感じた。寺田先生、本当にお疲れ様でした。

また部会長の投票も、三回も投票をやり直す部会もあり、面白かった。根回しなどまったくない証明で、時間がかかってもこれでよかったのだと思う。

今後の流域委員会の展開はどうなるのか。今年度は、委員の交代もある。委員の選考に関しては、淀川水系流域委員会の評価は、他の流域委員会に比べ高くはない。推薦など不透明な部分が多いせいだ。今度は、あっと驚くほどの選考をやって見せてくれないかな?

流域委員会裏話【6】 里川を愛した米山先生

準備委員会の委員であり、第一期の猪名川部会長をなさった米山先生が、亡くなりました。とても悲しいです。

最初のダムワーキングのメンバーにと先生に指名されたとき「私はダムのことをよく知りません。今から勉強させていただきながらでよければ。また先生のお考えとは違う意見を持つかもしれません」と申し上げると「それでいいです。勉強して自分の考えを持ってください」とおっしゃいました。ダムワーキングでは、メンバーが気さくに教えてくださるのに励まされて何とかついて行かせてもらいました。そのおかげで淀川水系全体へ目を向け、流域委員会がめざす「新たな川づくり」に夢をかける一人になれました。

「流域委員会に本気で取り組みたいければ、素人の自分は、自分の目で現地を見て、自分の耳で少しでも多く議論を聞くしかない」と自覚して、長浜だろ

うが木津だろうが、機会があれば、出かけるようになりました。それからあっという間の二年間でした。米山先生が、チャンスをごさったのです。忘れることはできません。

米山先生は、流域の住民とともに歴史を育んできた猪名川をとっても愛していらっやいました。庶務に断られても「猪名川の源流を訪ねたい」とおっしゃって、委員の有志で、管理区域外の上流へ出かけたこともありました。源流のある山に携帯電話のアンテナが建設中だったのには、びっくり。

上下流すべてに人が住む猪名川を「里川」と呼んで愛した先生の志に従う一人として、猪名川が、もっと住民に親しまれる川になるように、努力していきたいです。

おやさしかった米山先生、ご冥福をお祈りいたします。